40

各務文献著『整骨撥乱』について

今井　　秀
今井整形外科

1. 緒言

演者は一昨年の医史学会で各務文献の 200 回忌法要を報告した．今回は『整骨新書』の草稿である『整骨撥乱』（未刊）について考察する．

2.『整骨撥乱』の書名

『整骨撥乱』は美濃判和紙 123 丁からなる装丁本で，大阪府立中之島図書館が所蔵する．外題と首題は「整骨撥乱」だが，1804 年 11 月に書かれた自序の見返し題は「整骨撥揮」とある．さらに 1806 年 3 月に題辞を寄せた友人の奥田直行（「釣玄堂」奥田万里の父）も「整骨撥揮」と，また 1808 年 12 月に校訂を終え序を寄せた野呂天然は「整骨撥乱」としている．

撥乱は乱を撥（おさ）め，發揮は持ち前の能力を展開するという意味だが，天然が「整骨撥乱」に直したものと思われる．その後文献は『整骨新書』と命名し，1810 年 12 月に出版している．

3.『整骨撥乱』の内容

自序に「余嘗テ工人田中生ナル者ニ命ジ木ヲ以テ全身ノ骨骸ヲ彫刻セシム」とあり，「各務木骨」は 1804 年 11 月にすでに完成していたことが分かる．

文献は初め産科を志し，1800 年 4 月に官許を得て大阪葭島の刑場で女囚の解剖を行った．しかしこの解剖に満足できず，その後整骨医を志し難波村の年梅氏に入門したが整骨術は秘伝として教えてもらえず．そこで真骨による骨関節機構の研究より始めるほかないと，幕府の許可なく夜陰に乗じて刑場に転がる屍を自宅に持ち帰り解剖を行ったのである．

精緻な模骨の作製にはおよそ 1 年を要すると考えられるので，「各務木骨」は 1801 年春頃から 1804 年 11 月の間に完成したと推定される．1800 年に広島の星野良悦が幕府に献じた「星野木骨」は 6 年後の江戸の大火で焼失した．それ故，その後大槻玄沢を通じて「各務木骨」は 1819 年に幕府医学館に献納された．

また，「薬剤篇」に“麻睡散”は「大損劇傷ヲ療之時患人堪エザランコトヲ察セバ施術ノ痛ニ預ジメ當ニ先ズ此ノ散を與フベシ．即須臾ニシテ周身麻痺シテ其ノ痛ミ知覚セズ」とあるので，自序を書いた時点で麻睡散はすでに完成し実用に供していたことが分かる．文献が整骨医を志したのが 1800 年の解剖の後なので，1800 年から 1804 年の間に麻睡散は創薬試用されたものと推定される．

一方，華岡青洲は 1804 年 10 月 13 日に麻沸散を用いて乳癌摘出手術に世界で初めて成功した．

友人の中川修亭は天明の京都大火で罹災し，1788 年から数年間紀州で青洲と一緒に過ごしている．

修亭は 1796 年の『麻薬考』（富士川本）の序で“青洲が麻沸散を用い刳破の術を行った十数例すべてに麻酔効果があったのを目撃した“という内容を書いているので，青洲の麻沸散はこの頃すでに完成していたと考えられる．

さらに富士川本では，最後に「紀州花岡氏方」と「各務氏整骨新書麻睡散方」「解睡剤」を解説している．その後修亭は文献に依頼され『整骨新書』の跋を 1809 年夏に寄せているので，この時すでに麻睡散や解睡剤を認知していたと思われる．従って『麻薬考』の完稿は 1809 年以降であると考えられる．

我が国の整骨術は江戸中期の高志鳳翼や吉原元棟の施術から始まり，その後二宮彦可が 1808 年に『正骨範』を出版した．しかし『正骨範』には骨名図はあるが解剖図はなく，依然として支那の陳腐な整骨術の域を出ていない．

4. 結語

『整骨撥乱』から木骨や麻睡散の完成時期を推定した．また，『麻薬考』から青洲の麻沸散の完成時期や同書の成立時期も推定した．

文献は刑場の屍から「真骨収集」する涙ぐましい努力の末，正確な骨の解剖図譜「各骨真形図」を描き，骨関節損傷の合理的な治療法を発明し『整骨新書』を完成した．同時に全身模骨「各務木骨」を作製し幕府に献じた．さらにその 3 分の 1 大の小木骨を作製し，常に座右に置き弟子たちに按撫させ，解剖を熟知させて治療に役立てた．ほかにも麻睡散を創薬し，患者の苦痛を和らげる努力を惜しまなかった．済世救民のため日夜研鑽を積み，多くの斬新な治療法を創意工夫し実践した各務文献の実学の精神は，近代整形外科の先駆者として称賛に値する．